

就学前教育における自然体験型学習活動の実践

佐藤 登・高田 和宜*・大森 洋子*・阿濱 茂樹・友定 啓子・山本 善積・徳永 高男

Practice of Nature Experience in Preschool Education

SATO Noboru, TAKATA Kazuyoshi*, OOMORI Youko*, AHAMA Shigeki,
TOMOSADA Keiko, YAMAMOTO Yoshizumi, TOKUNAGA Takao

(Received July 20, 2007)

キーワード：自然体験、就学前教育、教育実践、作物栽培

はじめに

様々な場面で子どもの体験不足が指摘され、問題解決に向けての取り組みが各地で行われている。しかし、数多くの取り組みが行われているにも拘わらず、問題解決につながる構造的な様相が明らかにされていない。それだけに複雑であり長期に渡る研究が必要とされる問題であると思われる。また、学力の低下や体力不足といった事項については、数字に表した上での議論は様々あるが、因果関係について明確な結論は出ていないと考えられる。さらに、自然や技術についての体験についても、科学教育の立場からの取り組みが多く、農業教育や農村教育の立場からの実践研究はあまり見られない。

21世紀を生きる子どもたちにとって、食べ物を生産したり、食べ物が育てられる環境に接しながら様々な体験をすることは、食文化を適切に知るという観点から大変重要なことであると思われる。

したがって、本稿では農業体験を中心に、自然体験型学習活動として具体的に数年間、取組んだ状況を紹介し、今後追及すべき課題も明らかにしたい。

1. 学習活動の概要

自然体験型学習活動を1年間を通して実施するために、表1に示す年間計画を立案し、指導を行った。教育実践の対象者は、山口大学教育学部附属幼稚園の年長児とし、平成12年度より実施した。

農業体験活動を主な活動とし、水田で畑の周辺における自然についての体験学習も合わせておこなった。体験の場所は、主として教育学部実習農場の水田や畑を利用し、附属幼稚園敷地内でももちつきなどの活動を実施した。

活動の様子を写真1～8に示す。

*山口大学教育学部附属幼稚園

表1 自然体験型学習活動の年間計画

時期	活動内容
2月下旬	ジャガ芋のたね芋植え (年長児になる前の作業)
4月下旬	スイートコーン, 枝豆の種まき ジャガ芋芽かき
5月中旬	えんどう豆の収穫, イチゴ摘み, ジャガ芋土寄せ
6月中旬	ジャガ芋掘り サツマ芋つる挿し
7月上旬	スイートコーン, 枝豆の収穫, カボチャの収穫, 水路遊び
9月上旬	ダイコン, ハクサイなどの種まき
10月下旬	サツマ芋掘り 稲刈り (もち品種)
11月中下旬	ダイコン, ハクサイなどの収穫
12月中旬	しめかざりづくり (幼稚園で全園児)
1月下旬	もちつき (幼稚園で全園児)



写真1 イチゴ摘みの様子



写真2 えんどう豆の収穫の様子



写真3 サツマ芋のつる挿しの様子



写真4 枝豆の収穫の様子



写真5 夏野菜（カボチャ）の収穫の様子



写真6 稲刈りの様子



写真7 サツマ芋掘りの様子



写真8 水路遊びの様子

どもたちに季節感や食物の旬を自然に感じられるように、各作物の適切な栽培時期について配慮した。また、野菜など実のなり方などについても、実際に収穫する作業を通して、実際の様子を理解できるようにした。サンプルとして栽培したピーナッツなどは、園児だけでなく保護者も生育過程を知らない場合があり、収穫の体験の重要性が感じられた。さらに、出来るだけ農薬を使用せずに作物を栽培し、虫の被害など自然の影響について必要最低限の経験をする配慮を行った。台風や水不足、日照不足など自然の影響で芽生えが壊滅状態となった場合も園児に説明し、自然の法則や現象について理解を深める配慮をした。

自然の中で、作物を育てながら学習する際の工夫についてジャガ芋を例に述べる。

2月に年中児がたね芋を植える作業の準備として、事前にたね芋をふたつに切る際にジャガ芋の芽について説明し、切る位置の確認と刃物の使用についての注意を連動させた。さらに、たね芋を植える時に自分たちが切ったたね芋であることを認識させた。畑の畝は準備してあるが植え溝は自分で掘り、たね芋を置いた後堆肥を芋と芋の間に施して土をかけるといふ順序の作業であった。後日数本出た芽を一本にすることで大きな芋が掘れると話し、芽かぎと同時に残した芽の周りに土を寄せる土寄せ作業を行った。この作業を経て6月の芋掘りで自分たちのやったことが意味あることとして納得できたのではないかと推測された。

加えて、この自然体験学習を有意義にするために、園児が作業し易い環境にしておくことにも配慮した。例えば畑の畝の幅は園児の手が届きやすい幅に調整し、通路の幅も広めにした。さらに、グループ作業の場合は、人数に応じた広さと苗の数と当日の作業の流れを考えておき、作業の際の危険要因を排除する工夫もした。

主たる活動場所の教育学部実習農場には水田、畑、水路、空き地、急な土手、広く見渡せる緑の空間、昆虫、草花などと園児が自由に接する場がある。コスモスやヒマワリの群落、広いレンゲ畑や水路などを用意し、園児の発想で自然と接することができるような環境整備に心がけた。保育者、保護者、農場関係者の管理・指導のもとに、安全に自然体験学習を総合的に行うことができるように留意した。

さらに、稲刈りで収穫した米で餅つきをただだけでなく、畑で収穫した作物やあらかじめ栽培してある作物を実際に調理し、試食することとした。これは、栽培する作物に対して興味・関心を持たせるだけでなく、食べ物の安全性などについて適切に評価する姿勢を育てることができると考えられる。

2. 実践の成果（園児）

子ども達は、活動場所において指導者や保育アシスタントの保護者と顔合わせをし、その日の作業のやり方を聞いた後、グループごとに作業を進めていく。作業の後は、活動場所の自然に触れて遊んだり、収穫物の調理の手伝いを行う。

このような活動を、年間通して行っているが、この活動を通しての子どもたちの成果としては、次のようなことがあげられる。

1) 蒔く・育てる・収穫する・食べるという、食物の栽培から収穫までの一連を体験でき、それらの体験を通して、楽しさや喜び、感動などの体験ができる。

・自分たちが植えたジャガ芋やトウモロコシなどが、農場に行く度に大きくなっている様子を目の当たりにして、食物の成長の様子を感じることができる。

・たとえばジャガ芋では、種芋の植え付けから草取り、芽かき、土寄せ、水やり、堆肥蒔きなどを体験するが、そのような体験を通して、食物が成長するにはいろいろなことが必要であると知ったり、それらの楽しさや大変さを味わうことができる。

・収穫の喜びを味わうことができる。自分たちが育てたものの収穫の喜びはひとしおである。ジャガ芋やサツマ芋など土中から収穫するものでは、掘り出すたびに歓声をあげて喜び、スナッフエンドウ・トウモロコシ・えだまめなどは、たくさんなっているものをたくさん収穫する喜びを味わっている。

・収穫したものは、すぐに農場で調理して食べている。自分たちが育てたり収穫したりしたものを食べることで、一段とおいしく感じ、食が進む。また、とれたてのものや旬のもののおいしさをしっかり味わうことができる。

2) ダイナミックな自然体験と農業体験ができる。

農場の田畑、水路、斜面などで遊ぶことで、普段できない、ダイナミックな遊びができる。また、育てたり収穫したりするという一連の体験は、たとえば園の畑でもできることではあるが、広い田畑で、本格的に栽培や収穫の喜びを体験ができるところにその良さがある。

3) 四季折々の自然や草花、生き物に触れ、その美しさや楽しさを体験できる、

春にはサクラやレンゲ、夏には蓮の花や水路の気持ちよさ、秋には稲穂やコスモスなど、四季折々の自然に触れることができる。また、テントウムシ・イモリ・カエルなど様々な生き物があり、それらを見つけたり触れたりする楽しさが味わえる。

4) グループで一緒に動くときのルールや友達と一緒に行動することの大切さに気づくことができる。

グループ単位で活動することが多い。グループで一緒に動いたり作業したりすることを通して、勝手な行動を慎んだり、力を合わせたりするようになっていく。

5) 農場の関係者や保護者へ親しみを持ってかかわり、関係が深まる。

農場の関係者にいろいろなことを教えてもらったり、保育アシスタントの保護者と一緒に作業することで、それらの人とかかわりを深めることができる。また、楽しさやよろこびなどの感動体験を共有することができる。

3. 実践の成果（保護者）

附属幼稚園の活動では、保護者が、年長児6、7人のグループに一人の保育アシスタントとして参加することになっている。これらの保護者は、子どもが年少時または年中児クラスの時分から、保育参加を1、2年にわたって経験している。自分の子どもだけではなく、様々な子どもと直接かかわりながら保育や幼児理解について触れる機会を得ている。その経験をもとに、年長児の農場での自然体験をサポートしてくれる役を担う。

農場での体験を通して保護者が感じたことや気づいたことをノートに書き残していく、「アシスタントノート」を作っている。アシスタントノートは交換日記のように回し読みし、保護者同士の情報交換としてまた、保育者が保護者の思いを知る機会となっている。

このアシスタントノートから保護者が自然体験を通しての成果をどのように捉えているかを探った。成果は以下の4つの視点で整理することができた。

1) 幼児期の自然体験そのものの良さや必要性を感じる

- 2) 自然体験活動を通して幼児の育ちに気づく
- 3) 保護者自身が自然体験を通して、感動共有体験をする
- 4) 幼児、保護者、保育者、農場関係者それぞれのつながりが深まる

1) について、保護者ノートからの例

「日常の園生活とは違う生活の中で、自分たちで食べものの成長を見守り、収穫しておいしく食べる。この経験を通して、食というものや旬を自然に感じて欲しいなあと思いました。そして1年中何でもある今だからこそとても大事なことのように思えます。これから1年間親子でとてもいい時間が過ごせるのですね」

2) について、保護者ノートからの例

「植え付けのときとくらべて子どもの手際の良いところ！さすがです。1回目の時、『土は触りたくない』『面白くない』なんて言っていた子どもたちがとても楽しそうな顔をして作業している姿がたくましくほほえましく思いました。」

3) について、保護者ノートからの例

・「今ではなかなか見ることのないレンゲ畑，コンクリートで舗装されていない小川とてもノスタルジックな風景です。癒しの空気を感じました。お昼からは本当に暑く，小川に入り，アレ…長靴が流れてきます。でも気持ちはわかるなー，私も入りたい気分でした。びしゃびしゃの子もいてばたばたとお着替えをしてバスを送りました。手を振ってくれる子もいてちょっとウルッときました。」

4) について、保護者ノートからの例

・「雨など天候によって，苗や種が流されてしまった時は，農場の先生方がうえなおしてくださっているという事を，『子どもたちに秘密？それとも伝える？』との話を伺い，先生方の子ども達への愛情をひしひしと感じました。自分を育ててくれた恩師たちのことを久しぶりに思い出し，師のありがたさを思いました」

4. 考察

「蒔かぬ種は生えぬ」。この諺を就学前の子どもに言葉どおりにとり，種子を適期に蒔くときちんと芽が生えてきてやがて生長して収穫が望めるという事を将来に渡って理解させるものであるという逆説的な云い方で捉えてみた。種子を蒔いたことがないとこの諺は充分理解できないというのは後日分ってくるのだが，子どもたちが大人の援助の下で自然を相手に挑戦して良い結果を求めてみるが何時も上手くいくとは限らない。雨が降らなければ水をやり出来るだけ虫や病気から守る事は人間の知恵の範囲だが，台風となるとじっと過ぎ去るのを待つしかない。

人類は長い時間をかけてより良い生活を求めて努力してきた。農業への道は飛躍的な食糧生産向上となり安定した生活のよりどころとして人間の最も基礎の部分に位置づけられた。現在の日本は食糧自給率が40%と先進国としては最低の国であり，食べ残しは当然のこととして多量に存在しゴミとなって環境汚染の要素となっている。幼少の時からそのような生活環境で育ち全天候型の住居が中心となっているとすれば自然は厄介者，扱いにくい物として敬遠する雰囲気は家庭内で作られる可能性もある。しかし，人間が自然から遠退いて行くと特に幼児の時期にそうであれば生きていくのに必要とされる五感の形成が

疎かにされてしまう。その一方で安心、安全な食べ物を要求する家庭が増加してきたという事でそこにも自然体験、農業体験の必要性が形成されているのではないかと考えられる。

5. まとめ

本稿では、山口大学教育学部附属幼稚園における自然体験型学習活動の実践についてまとめた。この活動は、平成12年より毎年、年間計画に基づき組み込まれてきたものであり、自然体験学習を通して作物栽培だけでなく、自然の変化や決まりを感覚的に養うことができたと考えられる。

今後の課題として、次の点があげられる。

子どもは色々な体験をし、その蓄積を財産にして物事を判断するようになるのだから出来るだけ本物に接する機会を持てるように配慮しなければならないと思われる。五感を育てるような体験の一つとして野生や自然に近い農業を体験することではないかと考えられる。生長発達段階に応じた内容は農業分野に多く存在し未分化同士のところは共通している。やがて就学し教科学習になる時、具体的な事例で説明が行われるなら実感として理解が進むだろう。数や図形の世界は特に初めから納得することが必要で十分な体験が効果を現わしたりする。年一回のそれぞれの農業体験だから数年続けることが必要であると思われる。また、幼一小関連の発想でより有効な学習体系が取り得ると考えられる。

文献

山田 卓三：自然体験学習のすすめ－教育的効果と課題－，教育と農村，加藤 一郎監修
(財)農村開発企画委員会編，地球社，1986，pp. 75～101